

江戸の粋 世界初の都市型大衆文化

日本文化体験交流塾 理事長

米原 亮三

18世紀初頭、江戸の人口は、世界最大級で100万人を超えていたといい、その約半分は、武士と武士の家族であった。大名は江戸城の近隣で住み、その家来や商人、職人も近隣で住んだので、中心部の人口密度が高かった。

江戸では、木造建築が基本で、火には大変弱く、10年に一度大火があったという。こうした都市の構造が江戸の人たちの生活や文化に大きな影響を与えた。

江戸の「粋」の語源は、「生き」という。火事の多い江戸では、あまり物をため込んでも意味がない。「江戸っ子は、宵越しの金は持たない」というように、お金を持ったら、使いきった方が良いとの考えである。「今をいかに、かっこ良く生きるか」が美学であった。

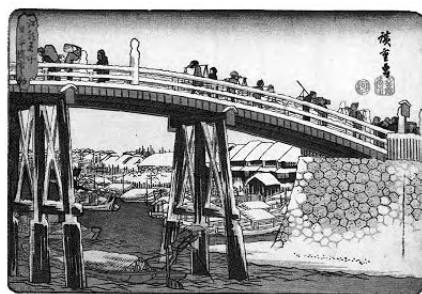
各国の大名・武士はもとより、日本橋などの大店も、本宅は近江や伊勢等の地方にあり、江戸は、仮住まいとの考えがあった。こうしたなかで、ヨーロッパのように、大きな建物を建てて、壁画や天井画などを描く文化は、あまり発達しなかった。むしろ、火事があっても持ち出せるもの、お国に持ち帰れるもの、つまり陶器や蒔絵、カンザシ、掛け軸などの小物に贅を尽した。

また、物流を支えるために、河川や運河が縦横に張りめぐらされ、土地全体の18%もが水面だった。日本橋川などの川沿いには棧橋を有する蔵が立ち並び(写真)、外国人からべ

は、歌舞伎・相撲・手品などの興行が盛んに行われ、多くの人で賑わった。その周辺では、花街が発達して、芸者のおどりに三味線の演奏が流行った。役者や芸者、相撲の力士を描いた錦絵が、プロマイドのように売れた。また、旅行にともない、安東広重の東海道53次や葛飾北斎の富岳36景などの浮世絵も人気があった。ヨーロッパの絵画が一人の画家の作品であり、複製のきかないものであるのに対して、浮世絵は、一回に数百枚と生産し、1枚がそば1杯程度の値段だったという。ほかしや、デフォルメされた形や色など、多様な表現手法が発達した。また、浴衣という簡易な着物がはやったのも江戸であり、京都の西陣などの重厚な文化との相違を感じる。

ヨーロッパにおいては、19世紀になると産業革命を経たロンドンやパリの人口は爆発的に拡大し、大衆文化が生まれる。浮世絵は、ムーラン・ラージュのポスターを描いたロートレック、ゴッホなど、近代絵画に影響を与え、陶器をはじめ、各種の細工物も海外で高い評価を受ける。

現在、相撲や歌舞伎は外国人に最も人気のある行事であり、当交流塾で行う、浴衣着付け、三味線、寿司づくり、浮世絵の擦りなどの体験も外国人に喜ばれている。京都の伝統文化とは異なるものの、江戸から受け継いだカジュアルな、そして環境にやさしい文化は、世界に誇れると思う。



ネチアにも例えられている。九州や北陸など、遠く離れた地方から様々な物資が運べたのも、水運のおかげであった。橋のたもとなどでは、寿司やそばなどの屋台の食文化が発達した。外国からの訪問者が一様に驚いたのは、町並みが美しく、また清潔であったことだという。糞尿を腐らせて、肥料として活用した。また、木材や和紙なども、何度もリサイクルされたという。

浅草寺や両国の回向院の境内に